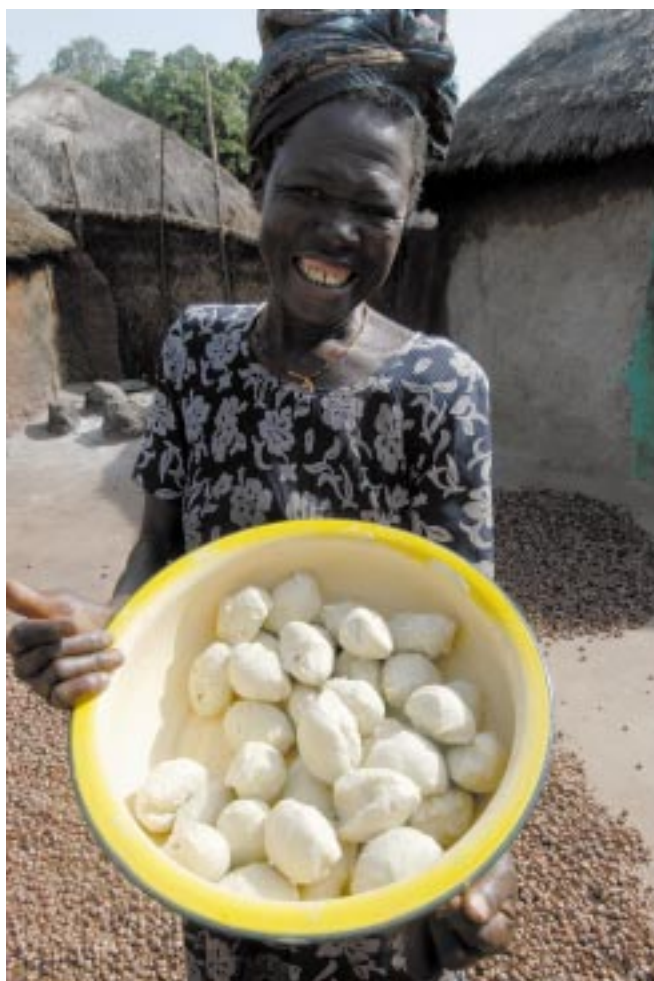


女

性が自慢げに差し出す白い塊、シアバターは、ガーナをはじめ中西部アフリカのサバンナに自生するシアの木の実から抽出したバター状の油脂。昔から食用油や塗り薬、整髪料などとして現地の人々に愛用され、昨今ではシアバターで作った保湿クリームやせっけんなどが海外市場で出回っている。

高い保湿効果、紫外線防止、抗菌作用など多方面で重宝されるシアバターだが、唯一の欠点が加工に時間と手間がかかること。播種から実の収穫まで20年近くかかることもあり、また加工工程も複雑なため、商品化には適切な品質・在庫管理が不可欠だ。2000年、JICAはシアバターの産地、ガーナ北部ノーザン州タマレ郡で支援を開始した。村には教育を受けていない人も多いため、女性グループを中心に、読み書き・計算からはかりの使い方、加工技術、会計、マーケティングまで教え、6カ所の加工技術普及所も開設。品質の確保されたシアバターの安定的な生産で売り上げは伸び、女性の社会参加にもつながった。



Close Up!

ジャイカの
あしあと

[ガーナ]

自然の恵み、 シアバターで 地方を活性化

保湿効果が高いことなどで注目のシアバター。品質改善と販路拡大でガーナの地場産業が生き生きとし始めた。

写真 = 吉田 勝美 (写真家)
photo by Yoshida Katsumi

またズオ村では、02〜03年、青年海外協力隊の鈴木真澄さんが良質のせっけん作りを指導。

「香りを付けたりパッケージにも工夫を凝らしました。ついには地元のホテルや首都アクラの土産物屋に置いてもらえることになったんです」。今も売れ行きは順調だという。

そして05年、ここに日本貿易振興機構（JETRO）の力が加わって、女性グループが生産したシアバターが日本に輸出されるようになり、販路拡大の道が開かれた。「その成果を単発で終わらせてはならない」とJICAは、生産・販売活動の継続とともに付加価値を加えた製品への加工技術指導も含めてシアバター産業を支援し、政策レベルとコミュニティレベルからガーナの地場産業の底上げを目指している。

ガーナの自然の恵み、シアバター。タマレの人たちが丹精込めて製品化したせっけんやクリームを日本で手にする日が待ち遠しい。

